

フォーラムを終えて

東京学芸大学国際教育センター

菅原 雅枝

今回のフォーラムは、「スクールソーシャルワークについて知る」ことを一つのテーマとして設定しました。会場の皆様からは「なかなか具体的な情報がないので、『知る機会』が持てて良かった」という声がありました。同時に、今回取り上げた福岡、横浜、川崎、そして参加者の皆様が活動している地域での「スクールソーシャルワーカー」の役割、動き、資格などがかなり異なっていることが指摘されました。特に外国人児童生徒に関わってきた方たちからは、ソーシャルワークとカウンセリングの違いや、ソーシャルワーカーの専門性に関する知識がなく、これまで関わってきたケースのうち何をどのような形でソーシャルワーカーに委ねていったら良いのかがまだわからないといった声も聞かれました。

スクールソーシャルワーカーをどのように育成し（あるいはどのような人をスクールソーシャルワーカーとして任命し）、どのように配置していくのかという点については、今後具体的に提案がなされていくものと思います。アンケートの中に「新しいものを作るだけでなく、あるものを上手に活用することも大切なのではないかと考えます。既存の資源や才能ある人などもう一度周囲を見直す作業も必要ではないでしょうか」というご意見がありました。日本以外の言語文化背景を持つ家庭・子どもへの支援は、これまで学校・地域・団体が中心となって取り組んできました。積み上げられてきた経験や知恵といったものには大きな価値があると思います。そしてそれはきっと、地域の特性（地域の歴史、人々の関係性の作り方、「異なるもの」への態度など）に根ざしたものになっているでしょう。このような支援者の知恵をスクールソーシャルワーカーという「専門家」に伝えていく場を確保することは、言語文化背景の異なる子どもたちを支えていくに当たって必要なのではないかと考えました。

学校・地域・家庭をつなぐ「スクールソーシャルワーク」が外国人児童生徒支援の大きな力になることは間違いありません。ただ、現状では「スクールソーシャルワーク」が果たしている役割を外国人児童生徒支援者が実感するには至っていません。外国人児童生徒支援の領域でもスクールソーシャルワークの役割についての情報交換、意見交換を重ねていく必要があると感じました。今回は、「まずは情報を」ということで企画いたしました。が、「スクールソーシャルワーク」の活動がより広く、日本の学校現場に根付いたころ、もう一度「お互いの専門性を尊重しながらともに子どもたちを支援していく関係を築く」ための会を持ちたいと思います。ご登壇くださった先生方、参加者の皆様、どうもありがとうございました。